

### 「心の四季」を歌うにあたって その3

作詞家吉野弘について触れてみよう。

1926年（大正15年）1月16日、山形県酒田市に生まれた。3歳の時疫病で生死をさまよひ、中学に上がってすぐ母親を亡くす。1944年に就職で上京し板橋に住むが間もなく徴兵検査を受け合格、だが入隊5日前に終戦を迎えている。戦後労働組合に専念するうち過労で肺結核を患い、3年間の療養生活を余儀無くされる。この頃から詩人としての活動を始める。

吉野弘は『雪に堪えてきた北国の人』と自称するも、三度も死にかけたことや、労働組合活動をする中で利潤を追求する世界に嫌気がさし、自分が「生かされて在る」ことを常に念頭に置き、人間らしく生きることを模索し続けた。

サラリーマン生活にピリオドを打ち作詩活動に専念していた1964年頃に「水のいのち」の成功によって乗りに乗っていた高田三郎との出会いがあった様である。高田三郎は最初に吉野弘の詩を読んだ時、歌には向かないと思ったようだが、その感性に惚れ込んで合唱曲用の詩を依頼した。吉野弘もそれを心得て定型的な詩に本人の信念を込めた普遍的テーマで書き下ろしていった。

「心の四季」における吉野弘の詩は、分かりやすさが全面に出ているように思えるが、他の自由過ぎる詩を読めば、平易さの中に如何に難解なテーマを持ち込んだか分かる。それはもしかすると厳しい人生を生きてきた彼本人にしか分かり得ないものかも知れない。だが、その詩には、私達の人生の節目節目で心の琴線にふれる不思議な魅力があり、歳を追うごとにそれを強く感じるのもこの詩の持つ力ゆえと言えよう。

T.Ozaki

次からはそれぞれの曲に対する高田三郎の思いと技巧を紐解いてみたい。

2017/05/19